

令和元年6月7日現在

機関番号：32414

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2018

課題番号：26770198

研究課題名(和文) 英語における非顕在要素を含む構文の効果的指導法-構文横断的・言語横断的視点から

研究課題名(英文) Developing an effective teaching method for English constructions with phonologically null elements: An approach based on multiple construction types across different languages

研究代表者

桃生 朋子(MONOU, Tomoko)

目白大学・外国語学部・客員研究員

研究者番号：30585807

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：学習者が起こす誤りの原因は有標性の理論によること、さらに学習段階により転移が起こること、学習者の母語に応じた習得の過程が明らかになった。あわせて、日本語や英語、そして中国語における非顕在要素の性質が一部で異なり、学習者が有している母語知識も異なる可能性があることもわかった。また効果的指導法については、まず学習者の学ぶ意欲をより引き出すための題材を提案した。その上で、提案した題材を大学英語教育での導入部分に用いた場合の効果も、数値をもって示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、学習者の学ぶ意欲をより引き出すための題材を提案し、その題材を大学英語教育での導入部分に用いた場合の効果も計ることも行った。より具体的には、まず非顕在要素の解釈を生む言語理論上の分析に取り組むことにより得られた成果をもとに、英語そのものの仕組みについて教授した。その際、学習者の母語との比較をできる限り行った。次にこのような英語教育が、社会貢献へと繋がる事例を紹介した。この取り組みにより、学生の学ぶ意欲を高めるきっかけをつくった。上述した教授法による効果を数値化する先行研究はほぼなかったが、本研究では、上記にあげた一連の教授法による効果を数値を用いて示し、成果をより明示化した。

研究成果の概要(英文)：I have shown that errors that L2 learners make are consistent with the theory of markedness, that we observe clear cases of L1 transfer, and that degrees of transfer differ based on their L2 proficiency. Overall, the results show that speakers with different L1 background show different developmental processes. Concretely, a comparative study of Japanese, English, and Chinese shows that they differ in terms of their syntactic properties of phonologically null elements, and that such differences can be explicated through the examination of their L2 error patterns.

In addition to these theoretical contributions, I have also contributed to the development of effective teaching. Concretely, I have developed some teaching materials which can attract students' interests, and examined quantitatively how effective these materials can be when used in introductory linguistics classes.

研究分野：英語教育

キーワード：非顕在要素 母語の転移 有標性の理論 大学英語教育

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

Kate washed the car carefully. But John didn't. に例示される非顕在要素を含む構文に対し、英語学習者が文法的解釈を付与することは困難である。従来の先行研究では、母語の影響が顕著に表れる解釈が優先されることが確認されたが、その結果とは異なり、母語の影響は顕著には現れず、むしろ有標性の理論が関与していることが明らかとなった。また、この結果が初級学習者にも当てはまることから、有標性の理論は学習の初期段階から関与する可能性も示唆された。したがって、英語における非顕在要素を含む構文の第二言語（以下、L2）習得に関わる要因として、母語の影響に加え、有標性の理論も追加する必要がある。また、学習のどの段階において、それぞれの要因が作用するのか、検討することも必須である。

2. 研究の目的

本研究では、A 非顕在要素がもつ解釈は、どのような言語理論上の計算のもと付与されるのか、B 学習者が起こす誤りの原因は、転移によるものか、有標性の理論によるものか、C 学習段階により誤りを起こす原因は異なるのか、の3つの課題に答えることで、D 英語における非顕在要素を含む構文の効果的指導法を開発することを目的とする。学習者の内的資質に焦点を当てることで、多岐に渡る外国語教育研究のどの側面においても、積極的に貢献する。また、構文横断的、言語横断的の考察を加えることで、L2 習得研究そのもの発展にも寄与する。

3. 研究の方法

非顕在要素を含む構文に関する、言語理論研究・L2習得研究の文献分析を行う。

予測の構築・検証を行い、インフォーマントから母語知識を引き出す。

学習者の正確な反応を引き出す言語材料・分析方法・刺激提示順などを検討する。

予備実験を行う（被験者：日本語、中国語、韓国語をそれぞれ母語とする英語学習者10名ずつ。刺激文：非顕在要素を含むテスト文に加え、非顕在要素を含まない文を統制文として用い、テスト文と異なる解釈を統制文に付与できるかどうかを判断する。方法：テスト文・統制文それぞれにつき絵を一つ提示し、文が示す状況と、絵が示す状況が合致しているかどうかを、被験者に判断してもらう。）。

実験により得られた結果を分析し、再度刺激文・刺激提示順等を検討する。

英語のレベルを測った上で、本実験を実施する（被験者：日本語、中国語、韓国語をそれぞれ母語とする英語学習者30名ずつ。刺激文・方法：予備実験の結果に基づき構築する。）。

実験により得られた結果を統計ソフトRを用いて分析し、仮説の妥当性を検討する。

研究成果を国際学会等で発表する。

L2習得メカニズム及び効果的指導法を提示する。

4. 研究成果

本研究を通じ、学習者が起こす誤りの原因は有標性の理論によること、さらに学習段階により転移が起こること、学習者の母語に応じた習得の過程が明らかになった。あわせて、日本語や英語、そして中国語における非顕在要素の性質が一部で異なり、学習者が有している母語知識も異なる可能性があることもわかった。

また上記「2. 研究の目的」課題Dについて、効果的指導法がより効果的になるためには、学習者自身が当該指導法を受け入れ、実行するための、学ぶ意欲も必要である。本研究では、指導法の開発に加え、学習者の学ぶ意欲をより引き出すための題材を提案した。そのうえで、提案した題材を大学英语教育での導入部分に用いた場合の効果を計ることも行った。より具体的には、まず課題A・B・Cに取り組むことにより得られた成果をもとに、英語そのものの仕組みについて教授した。その際、学習者の母語との比較をできる限り行った。次にこのような、英語学的・言語学的視点を取り入れた英語教育が、社会貢献へと繋がる事例を紹介した。以上の取り組みにより、学生の学ぶ意欲を高めるきっかけをつくり、そのことによる効果が認められた。さらに上述した教授法による効果を数値化する先行研究はほぼなかったが、本研究において発表した論文では、上記にあげた一連の教授法による効果を数値を用いて示し、成果をより明示化した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 5 件)

川原繁人・桃生朋子 (2019)「マイボイス」を使って音声学を教える有効性について：アンケート調査の報告. 音声研究 印刷中 (査読有)

川原繁人・桃生朋子 (2018) 音象徴で言語学を教える：具体的成果の紹介を通して. *Southern Review* 32: 3-14. (査読有)

桃生朋子・川原繁人 (2018) マイボイスと大学言語学教育. *REPORTS of the Keio Institute of Cultural and Linguistic Studies* 49: 97-107.

川原繁人・桃生朋子 (2017) 音象徴の言語学教育での有効利用に向けて: 『ウルトラマン』の怪獣名と音象徴. *音声研究* 21(2) 43-49. (査読有)

川原繁人・桃生朋子・皆川泰代 (2016) 大学における音声学教育とマイボイス. *音声研究* 20(3): 13-20. (査読有)

[学会発表](計 6件)

桃生朋子. 音象徴と大学言語学教育. ことばの構造と脳科学研究会、目白大学、2018年3月21日.

Monou, Tomoko and Shigeto Kawahara. Language and Us -Insights from MyVoice-. MAPLL-TCP 2017. 国立国語研究所、2017年7月22-23日.

桃生朋子・川原繁人. マイボイスと大学言語学教育. 言語科学会第19回年次国際大会、京都女子大学、2017年7月1-2日.

川原繁人・桃生朋子. 音象徴からみる『音とことばのふしぎな世界』: ポケモン、ウルトラマン、メイドさん分析から言語学教育へ. 沖縄外語文学会、名桜大学、2017年6月17日.

桃生朋子・川原繁人. マイボイスと大学教育 2. 第7回マイボイスワークショップ、慶應義塾大学、2016年11月5日.

川原繁人・桃生朋子・皆川泰代. マイボイスと大学における音声学教育. 早稲田大学、2016年9月18日.

[図書](計 0件)

[産業財産権]

○出願状況(計 0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年:
国内外の別:

○取得状況(計 0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年:
国内外の別:

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名:

ローマ字氏名:

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：William O'Grady

ローマ字氏名：(O'GRADY, William)

研究協力者氏名：平川 眞規子

ローマ字氏名：(HIRAKAWA, Makiko)

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。